

ポンデギな夜

今井清賀

一九八三年九月一日。大学主催の「韓国セミナー」も残り三日となった日の朝。韓国南部にある姉妹校で三日間の交流を終え、一行はソウルに上った。ソウルでの目的のひとつに我が大学と新たに姉妹校関係を結びたいという大学校への表敬訪問があった。

この大学校では、いわゆる「普通の」学生交流が持たれた。それはそれで「普通に」楽しいひとときだった。我々参加者十五名中、少しばかりの英語ができる者と、先方の、ほんの少し日本語ができる者が率先して、意見交換など有意義な時間となった。先に訪問した姉妹校となっっている大学校には、日語日文学科があり、意思の疎通にかんしては苦勞を感じなかったが、このソウルの大学校は日本語に関する専攻がなく、口頭でのコミュニケーションには困難がともなった。しかし当時韓国では漢字排斥運動はまだ徹底しておらず、専門書や新聞記事の表題には漢字が多く使われ、大学生ならばある程度漢字の読み書きができ、いざとなれば漢字による筆談でかなり意志の疎通が可能だった。

その夜行動がフリーになった。昼の交流で仲良くなった兵役を終了した学生五人と、二浪一回生の後輩K君と私（一浪四回生）七人で一献傾けることになり、夜の繁華街へと足を向けた。当時この大学では学生運動が先鋭化していて、引率の教授から「個人的な交流には十分注意するように」と釘を刺されていた。五人と合流して分かったことだが、どうやら彼らはその闘士で、日本の学生の政治意識について知りたいという気持ちがあったようだ。

なにはともあれ彼ら行きつけの「隠れ家」的な店へと案内された。その店は繁華街から少し外れた小ぶりなビルの一角にあり、ネオンはおろか看板さえ掲げられておらず、入口あたりも暗がり、まさかその奥に「飲み屋」があるとは思えない場所。間口九十センチほどのドアもない洞窟の入り口のようなところに歩を進めると五歩ほどで壁に突き当たった。そこを左へ直角に曲がるとようやく右手側に薄暗い灯りが見えてくる。幅約百二十センチ、奥行約五メートルほどの鰻の寝床のような空間が確認でき、そこへカウンターが設置されている。カウンターとは言うものの厚み約三センチ、幅約三十センチ、長さ約三メートルほどの建材板が設置されているという素朴なもの。

彼らはここなら政治の話をして盗聴されたり官憲が来るといふようなことはなく、もし来たとしても店主が合図して裏口から逃がしてくれるから安全だという理由で集うのだとのこと。要は「アジト」と言ってもいいだろう。しかし丸椅子が六脚しかない。それ以

上の人数になったら立ち飲みをするとのこと。この夜の客は我々しかおらず、すでに椅子は全て「占拠」されたわけだ。一番奥では二人でひとつの丸椅子に「尻合いの仲」よろしく座った。この店のメニューは、飲物はビール（クラウン、OB）と焼酎「眞露」（現在のようなポップなラベルではなく、当時はリアルなイボガエルがトレードマークとなっているもの）、そして酒のアテ（肴）は缶詰のみ。ただし屋台や雑貨店などから店内へ食べ物を持ち込みは自由だった。

当時韓国では、ビールは高価で学生にとって出費のわりには酔っぱらえない酒。令和現在の言葉で言えば「コスパが悪い酒」ということだ。一方の眞露はコーラやサイダーよりも安価で、かつ舌にまといつくような甘みがあり、味の濃いアテがなくても飲めるということから、学生たちはこれを好んで飲んでた。決して美味しいとは言えないもの、とつと酔っ払える酒ではあった。

まずは眞露で乾杯。手始めに自己紹介から。座には七人いるので結構時間がかかる。その間小ぶりの瓶詰め of 眞露は次々と空瓶になっていく。自己紹介を終えすこし「出来上がった」ところで、我々は国家とは如何にあるべきかやら、資本主義と社会主義の正義とは、はては分断国家についてなどを語り合った。

当時の私は七十年安保闘争に関する書籍を読みあさっていたこと、K君の入学二年前に、学費値上げに関して学校当局と学生間で紛糾しロックアウトという事態も目の当たりにして、リアルな闘争も目の当たりにしたこと、また前年に大学主催米国姉妹校交換プログラムをきっかけに英語力はそこそこついていたので、彼らとはかなり突っ込んだ議論ができた。しかし詳細部になると私と彼らの英語力にも限界があり、もどかしさはついてまわる。そこで「漢字の仲介」といきたいところだが、手持ちにはホテルのメモ用紙二枚しかなく、しかも店内は薄暗く字の判読が極めて困難な状態のため議論は立ち止まることしばしば。酔いが回るまでのK君といえは彼らとコミュニケーションをとる際は私の通訳を必要としていたのだった。

ここで彼らは酒のアテを店主に注文する。出てきたのは缶詰四缶。容器には何やら背中がぞくつとするようなイラストが暗がりに浮かび上がる。彼らのうち一人が缶切りをもって次々缶を開けていく。そのうちのひとつが私とK君の間に置かれる。いくら焼酎を生で飲んで酔いはじめていようとも、食指が伸びない見た目をしている。薄明りの中蝶の類の蛹たぐいのような物体が容器六分目ほど入っていて、上部ではたっぷり入った汁にそれがプカプカ浮いている。

はたして彼らは我々日本人学生が口にした瞬間の反応を楽しもうとしているのか、それとも「俺たちのいつもの酒のアテだよ、食べてくれよ」と思っているのか。薄明りの中で

あっても五人の目線が我々二人に注がれていることが認識できる。ん？ 彼ら、笑ってる……。

K君いわく「先輩、これを食べないと友達になれませんよね……」
「せやな……」と私。

彼らに見做い爪楊枝でブツをブスツと刺して口に運ぶものの、口腔内で「浮かせる」状態。ああ、これを歯で砕いたら、ぶちゅっと汁が出てくるんだろうなあ……私だけでなくK君もやつぱり、その、かみ砕く勇気がなかった様子。

思い切っつかみ砕くと予想通りの食感と、コーヒーフレッシュのような濃度の液体が口腔中に行きわたり、瞬間寒気におそわれた。しかし当然と言えば当然なのだが、何となく眞露の相伴にはよく合うような気がしてきて、K君と私は酔いもあつてのことだが、気がつくると十粒（個？ 匹？）ほど口に運ぶようになっていた。

その後は「こいつら」と同じ土俵に立てたとばかりに、前半部分のぎこちない議論がスムーズに進行するようになり、また私を介してコミュニケーションをとっていたK君が、ありつたけの英語力を駆使して彼らと直接アクセスするようになっていた。「先輩、ボク受験勉強三年やってきたんですよ」と、笑ってポンデギを眞露で喉に流し込みながら大きな声で言う酔ったK君。

缶詰のポンデギはK君と私、彼ら五人の間にある「文化通念」という見えない壁を一気に打ち砕いてくれた。この後七人は「ポジャンマジャ」（屋台）へと河岸を変え、日付が変わる直前まで香辛料たっぷりのトック（棒状の餅）をアテに眞露を痛飲。ホテルまでどのように帰ったのか記憶にはないが、たぶんいい酒だったのだろう。

翌朝、K君が私の部屋の扉を激しくノックした。「どうした？」と宿酔の頭でドアを開けると、「せ、先輩。テレビをつけてください」。えらくあせった面持ちで部屋に飛び込んできた。おもむろにテレビのスイッチを入れると、男性アナウンサーとアシスタントらしき女性が映し出され、北海道北方辺りの地図をバックに神妙な面持ちで話している。韓国語は、わからない。ここは「国際ホテル」だ、英語放送が入るぞとチャンネルをかえると、大韓航空機这个消息がこの辺りで途絶えた。ソ連軍用機に撃墜された可能性がありとのこと。窓の外に目をやるとこのホテルの入り口の太極旗が半旗になっている。ソ連と北朝鮮はともに社会主義でつながる国だ。これは、南北緊張に影響があるのか。今日我々は板門店に入るのだが問題はないのか、というかそもそも板門店には入れるのか。酔いは一気に冷めた、というか青ざめたという感覚を得た。

引率の教授は複数個所から情報を集め、我々専属の女性ガイド氏と緊急に相談。板門店には入れるとの確認がとれる。教授は一連の流れを大学に報告、ゴーサインがでて我々は

板門店へと向かうことになった。この時ほど二日前に提出した、板門店入境に際しての書類「何があっても韓国当局は責任を持たない。私は訴訟致しません」といった内容の宣誓書にサインをしたことの重みを感じたことはない。

当日の板門店国境線には北の兵士の姿は見えず、彼方から拡声器を通じて心地よい音楽をバックにトーンを落とした女性の声が聞こえてくる。ガイド氏に「あれは何と言っているのですか」と尋ねると、「こちらは天国ですよ。さあいらっしゃいと言ってます」。「行けばどうなりますか」と尋ねるメンバーにガイド氏は瞬間キツと険しい表情になり「両方から蜂の巣にされます」と腹の底から出てくる声できっぱりと言いつ放った。

前夜の議論はあくまで机上のこと。いまここに分断国家の現実が露呈している。昨夜の彼らはもちろんここへは足を踏み入れることはできない。また十五名のメンバー中三名はいわゆる在日の学生で彼らもここには入れない。ソウル市内で待機している。政治に疎い現代っ子の日本人だけがこの地を踏んでいることの理不尽さを感じながらソウルへと戻る。臨津河を渡る際、往路目にして緊張が頂点に達した、南北分断時に破壊されたまま放置されている鉄道鉄橋を再び目にする。板門店を経験した後だと分断国家の厳しき、緊張がよりリアルに迫ってくるのだった。その晩雜貨店を探し眞露とポンデギを求め、K君と私の部屋で飲んだのだが、気持ち良い酔いにはならなかった。

ポンデギの缶詰……かいしこ蚕の蛹さなぎの水煮なり。